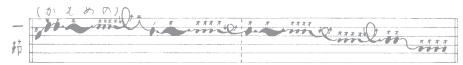


やんさノエ

会報

2004 No.1



発行 江差追分会

2004.2.1

北海道松山郡江差町中歌町 193-3

TEL 01395-2-5555

FAX 01395-2-5544

ホームページアドレス <http://www.hakodate.or.jp/oiwake/>



江差追分を心の糧に

江差追分会会長 濱 谷 一 治

景気が回復に向っているといわれながら、それが実感できないまま、今年も明けました。そして地方自治体では、町村合併の重荷を背負って、今後の方向を見出すべく取組んでいるところです。

江差の歴史をふりかえって見ますとニシン景気が落ちこんで、何度も不振の時代をくぐり抜けてきました。先人は町が不振に落ちこんだ時期にこそ、「追分」を支えに立ち向いはねのけてきたものと思います。そういう意識が今日の江差追分を創りあげ町の繁栄を支えてきたものと思います。

経済本位で走りつづけてきたつけが、今、物心両面で私たちの生活を不安にしていますが、こういう世相にこそ先人のつくりあげた追分が生きる力になるのではないかと思います。江差追分に限らず、地域に根ざした民謡を心の糧として考える必要があると思うのです。

今年から江差では二つの高校が統合される機会に江差追分を選択科目として授業にとり入れることが決り、その取組みをしています。

青坂満師匠は「江差追分は人間の生きざまをうたった唄だ。その追分の心を学んでほしい」といつております。若い世代の新しい取組みを、心から支援していきたいと思えます。

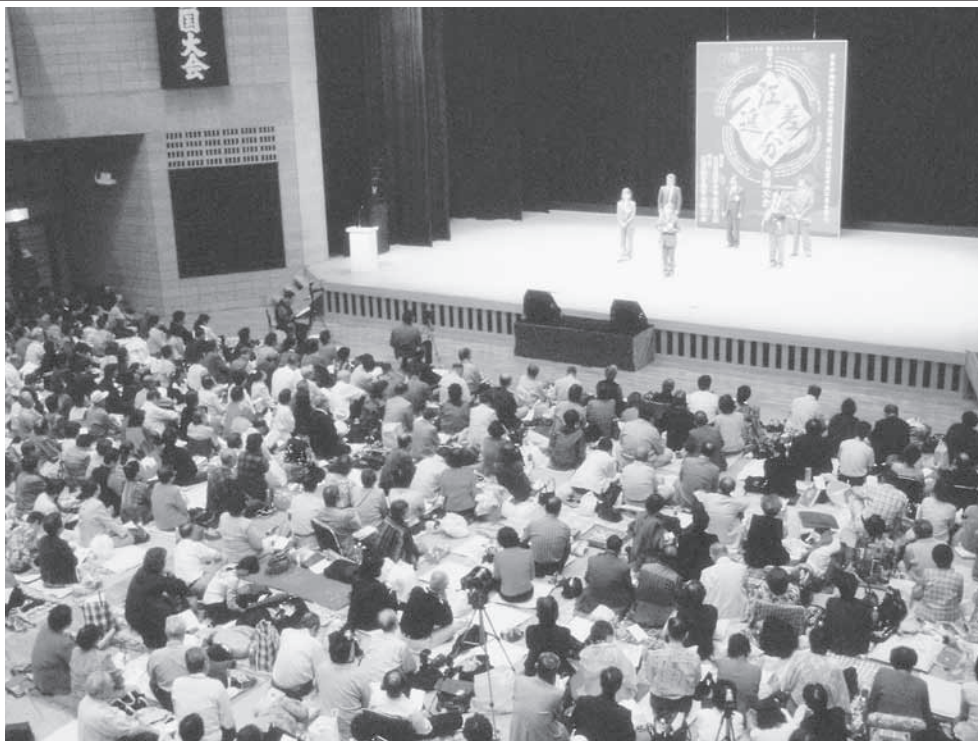
江差の風土に根ざした江差追分が、全国の愛好者によって、日本の音楽文化を創り出していくことを願っております。

今年も江差追分会会員のみなさまのご活躍をご期待申し上げます。

第四十一回 江差追分全国大会

一般：寺島絵里佳 熟年：奥泉勇篁 少年：中島琴美 優勝

平成十五年九月十九日から三日間、第四十一回江差追分全国大会は約四百名が一般、熟年、少年の三部門追分日本一に挑戦し熱唱した。



その年の「日本一」を決める一般の部では、今年こそ応援する唄い手に優勝旗を！という聴衆の熱い声援に支えられて、乙部町の寺島絵里佳さん（江差追分会館勤務、二十歳）が見事第一位の栄冠を獲得した。絵里佳さんはかねてから地元の追分姉妹として期待されている寺島三姉妹の長女で、第一回江差追分少年大会で優勝した実績をもつ。しかし、昨年はいまひとつ調子が出ず、予選落ちしていただけに大会史上初めて少年の部、および一般の部という二冠を達成したこのたびの優勝は喜びもひとしおだったようで、優勝旗を胸にうれし涙にくれていた姿が印象的であった。

六十五歳以上の熟年組では、これまで一般の部で入賞を重ねていた札幌地区のベテラン奥泉勇篁氏が、持ち前の深みのある声調を生かして優勝、また、少年の部ではこれまでの優勝者としては最年少の中島琴美ちゃん（江差・十歳・杉山由夫師門下）が筋の良い見事な節回しで優勝を飾った。

大会の終了に際して発表された審査員の講評によると、全般的に唄のレベルは向上してきており、とくに本州方面からの出場者の進境ぶりには著しいものがある。しかし、各方面の出場者とも、尺八やソイ掛けと唄のタイミングが合わないケースが見られ、また、唄の前半に声を使い切ってしまうため、後半が粗雑になる傾向も見られるので注意する必要がある。それに個性の乏しい唄が多いので、もっと唄の中に個性を多く

出してほしいという要望が強く出された。さらに二声上げ、本すくり、半すくりなど唄の基本を確実に習得することの重要性が強調され、とくに追分界の将来をになう少年たちについては、さらなる精進を期待するなど、今回の講評には、追分の魅力を一般にさらに広め、永く伝えるための当面の指針が、審査員一同の一致した見解として簡明に示されていたようである。

（取材・館和夫）



優勝 中島 琴美さん

一般の部

全国大会の焦点である一般優勝の行方が全くつかめないという下馬評が今大会の関心事であった。

昨年活躍が目立っていた地元寺島三姉妹の長女絵里佳(二〇)が予選落ちの番狂わせで予想が難しくなった。最近はその手の女性が優勝を独占傾向のなかで絵里佳は着実に順位をあげてきただけに行方が混とんとしていた。

若手か、あるいは年輩格のベテランか、それぞれの思惑が交錯した。

上位入賞をつづけている実力派は、優勝の力をもっているといっている。その実力を本番舞台でどこまで出せるかにかかっている。その栄冠を寺島絵里佳が前年のプレッシャーをのり超えて見事に手



優勝 寺島 絵里佳さん

にした。若いだけにこれからの追分が期待される。

女性陣の上位傾向に久しぶりに新鋭の男性間島秀格(二八)が準優勝にあがってきた。次回大会に活躍が期待される。

一般の部入賞者(高一以上64才迄)

- 優勝 寺島絵里佳(水堀愛好会) 20才
- 二位 間島 秀格(長 沼) 28才
- 三位 松田美和子(釧 路) 26才
- 四位 山本 康子(鷗声会) 43才
- 五位 寺島 絵美(水堀愛好会) 18才
- 六位 大沢 理絵(静 内) 28才
- 七位 播磨 孝雄(函館澄声会) 60才
- 八位 日沼 一声(和春会) 50才
- 九位 前川 悦子(厚沢部) 29才
- 十位 山本ひとみ(十勝大雪) 28才

熟年の部



優勝 奥泉 勇篁さん

昨年まで一般で出場、常に安定した唄で入賞をつづけていた奥泉勇篁さん(六五)が優勝を手にした。

奥泉さんは札幌を中心に永年民謡界で活躍、江差追分の出場歴もあり一般でも入賞をつづける実力をもっていた。一般でも数少ない男性入賞の追分は、低音で味わい深いと定評があった。追分会札幌鷗鳴支部を主宰、札幌民謡界でも役職を担っている。

熟年の部では本州から田中光男さん(大阪なにわ)千田文男(ポト神奈川)も入賞している。

熟年の部入賞者

- 優勝 奥泉 勇篁(札幌鷗鳴) 66才
- 二位 成田 誠(札幌南) 65才
- 三位 榎本弥惣七(網走声友会) 68才
- 四位 村田 政美(登別友の会) 77才
- 五位 田中 義昭(札幌白石) 69才
- 六位 益山 新治(旭川中央) 66才
- 七位 田中 光男(大阪なにわ) 66才
- 八位 細木 利良(大平原) 68才
- 九位 菅原 圭一(札幌東白石) 69才
- 十位 千田 文男(ポト神奈川) 66才

審査員特別賞

永田 理文(ブラジル) 72才

少年の部

小学校四年 中島琴美 優勝

寺島三姉妹や札幌の黒森三姉妹など少年の部は姉妹兄弟で歌う優勝が多いが、今年も姉妹で奨励賞を受賞活躍した中島琴美、弥生姉妹の姉小学校四年生の琴美が最年少で優勝した。幼いころから地元の杉山由夫師の会に所属してうたってきた。

寺島姉妹以来久しぶりの地元からの少年優勝で地元江差のちびっ子たちの励みになるだろう。杉山師の会には子ども仲間が多勢いるから若い琴美のこれからの追分が期待されている。

少年の部入賞者

- 優勝 中島 琴美(かもめ会) 小4
- 二位 榎林 佳也(札幌南) 小6
- 三位 林 久美子(札幌南) 中3
- 四位 木南 早加(百万石春会) 中3
- 五位 長谷川有沙(水堀愛好会) 小6
- 六位 赤石 聖実(声友会) 中1
- 七位 渡辺 千秋(帯 広) 中2
- 八位 今測 結美(函館謡華会) 中2
- 九位 川畑 貴寛(和春会) 小4
- 十位 中島 弥生(かもめ会) 小3

審査員奨励賞

- 黒森ひかる(札幌南) 小4
- 金村 萌子(天 北) 中1
- 木内 絵里(札幌中央) 中2
- 浜口 優花(秋田王藤会) 中2
- 藤谷 優美(秋田王藤会) 小5

母音を聴く江差追分……………岩淵啓介

江差追分は母音(ほいん)を聴く歌だ
と思うことがある。

全国大会で何十人、何百人もの歌に
酔っていると、耳の奥に海鳴りのように
轟き、こだまする、通奏低音のような、
わだかまるものがある。

それが母音の声である。「あああ」「お
おお」「えええ」「ううう」「いいい」と
鳴り響いて止まない。

とても心地好い声だ。人間の音声、言
語の基盤の声が、揺籠のように心を包む。
最もよく、しばしば歌われる「かも
め」の歌詞をローマ字にしてみよう。

- 1 k a m o m e n o
- 2 n a k u n e n i
- 3 f u t o m e w o
- 4 s a m a s i
- 5 a r e g a
- 6 e z o t i n o
- 7 y a m a k a i n a

母音だけを取り出して並べてみよう。

- 1 a . o . e . o
- 2 a . u . e . i
- 3 u . o . e . o
- 4 a . a . i

- 5 a . e . a
 - 6 e . o . i . o
 - 7 a . a . a . i . a
- 一見して明らかかなように、縦並びに見ても横並びに見ても、母音が綺麗に規則正しく、反復され、リズムを持ち、つづれ織りの模様を描いている。

一節の出だしの「a・o」は、二節の頭の「a・u」に承けられ、以下、各節に「u・o」「a・a」「a・e」「e・o」「a・a」と見事に尻取りのように繰り返される。

しかも、各節の頭韻は、全開音の「a」が五個揃い、閉音の「u」と半閉音の「e」が拍子をとる。

さらに、脚韻というべき、各節の区切りの母音は「o・i・o・i・a・o・a」と並ぶ。つまり「o・i」「o・i」「a・o・a」と整然と形を織り成している。

さらに、「こ」を聴かせるように、「二(ふた)声」が挙げられる。「かもめ」の「め」は「め、え、え、え、」と歌われ、「おしよろ」の「ろ」は「ろ、お、お、お、」と尾を曳く声であることは、ご承知のとおり。

民謡、広くいえば邦楽の歌声の中では「二声」「産み字」の詠唱法は普通に聴かれる。

これは「小節」とも言われる。由緒正

しい装飾音の歌い方で、「謡曲」が家元という。

長唄では、東海道のことをいう「東路(あづまぢ)」を「あづまちイイ」と歌い、歌謡曲では、お馴染みのとおり、美空ひばりの『東京キッド』では「歌も楽しいイイや」と響く。たまたま、リヒャルト・シュトラウスのオペラ『サロメ』を聴くと、サロメは、預言者の名「ヨハナン」を、情愛を込めて、「ヨッハァァナァァン」と呼んでいた。

ために、母音の数を数えてみる。

最も親しまれている「かもめ」では、a 十個、o 六個、e 四個、u 二個、i 四個。同じく「おしよろ」では、a 七個、o 八個、u 三個、e 四個、i 四個となる。



どちらも「閉音」も「u、i」が少ないのが共通している。「開音」の「a、o」が圧倒的に多い。口の開きが大きく朗々たる、のどかな「a、o」が好まれ、口の開きが小さく絞るように鋭い「u、i」が避けられているかのような歌詞なのである。(追分会理事)

●江差追分全国大会優勝者

第一代から四〇代

CD五枚・カセットテープ四本

江差追分全国大会優勝者四十人の追分(前唄、本唄、後唄)を完全録音したCD・カセットテープが、江差の録音製作会社HKサービスから発売している。

CD五枚

一 枚 二、五〇〇円

五枚組セット 一〇、〇〇〇円(税別)

カセットテープ四本

一 本 三、〇〇〇円(税別)

●江差追分歌詞漫画集(復刻版)

歌詞漫画 四〇曲 古館鼠之助著

追分歌詞集 四〇曲(新作入り)

江差追分漫画集、古館鼠之助著、昭和二年発行のものを原型通り復刻、それに主に歌われている歌詞前唄、本唄、後唄四〇曲を選びは録、新作歌詞も加えている。発行HKサービス。

B 六判 一冊 一、〇〇〇円(税込)

※申込は江差追分会へ

一枚のSPレコードを聞きながら(一)

懐古・江差追分を愛した吉澤北斗師：高田 裕



吉澤 北斗師

意外だった。

明治三十五年生れで漁師一途の男が、ピアノ伴奏で七八回転のSPレコードに江差追分を吹き込んでいたなんて。バイオリン、チェロあたりは、たまあに聞く伴奏楽器だが、ピアノも違和感がなく、すばらしいコラボレーション(合作)だ。ちなみに、他の(江差追分レコード)は、凛として彼の魅力を充分感じさせる古風で端正なものとなっている。

自然・海をよく知ることは追分の基本である。その認識をもとに、(追分)をこよなく愛し自分の才能や可能性に挑戦しようとしたのではないか。はたまた、追分界に新しい息吹きを与え、若返らせようとしたのかもしれないし、なにより、彼自身のなかに新たな個性を目指す若々しさがあつたからだろう。

生前、こんなことも話してくれた。

「レコード吹き込みの上京は、コンブ漁が終る九月すぎが中心だったが、函館に帰ってもすぐ家に入らず、前浜で着替えをして仕事をしたんだ」

「この頃、江差追分はチョット面倒にしているなア…」

「昔みたいに楽にうたえたいのに」

「でも、三・六(節)のオトシは結構つらいもんだヨ」と。

三三歳のときからキング、コロナ、ニッソー、マーキユリーなどのレコード各社

に(江差追分、沖揚げ音頭、ナット節、米山甚句)など数多く吹き込んだが、ご本人はそれらを一枚も持っていなかった。と言うのも、それなりの理由がある。

「まだ未完成なものを吹き込んでしまった、と思ったので全部くれてやったヨ」これもまた無欲恬淡な話だった。その彼も病にかてず昭和六二年、享年八五歳で黄泉の国に

旅立つ。

改めて師匠を紹介しよう。

吉澤北斗(本名・吉左衛門、函館・根崎町、旧・銭亀沢生れ)。雅号の北斗は劇作家の菊田一夫が命名。(長)マルチョウの屋号で終生、漁師稼業。

若い頃の彼は義侠心が強く、頑張り屋でかなりの勝ち気。ついたニックネームが「ごんぼ」であった。北海道弁の「ごんぼ」に由来するのだが、少し頑固で個性が激しかったのだろう。もうひとつ、両親の影響で十六歳の頃から(追分)をうたいだし、当初はあまりにも声の調子が高く「半鐘」と言われたほどである。

戦前(昭和四、五年頃)、千葉の鯛漁場

にマキ網漁の勉強をかねて出稼ぎに行き

銭湯時間になると、北海道(吉澤)が風呂に入ったぞオ、と言って、地元の連中が彼の(追分)を聞きたく、ゾロゾロと押しかけたエピソードが残っている。

この噂話をしたところ、「仕舞には俺もきまり悪くて、銭湯を変えても道産子は肌が白くてすぐ判り、まだ同じことになるんだ」と、潮やけた顔の照れわらいを想いだす。

もし時間があるならば、追分会館にある彼のテール掛けを眺めながら、そのむかし(江差追分)をこよなく愛した吉澤北斗師を偲んでほしい。

(追分会理事)



江差追分全国大会で優勝した

寺島

絵里佳さん

優勝旗を手渡されると涙声になり、会場で応援していた地元追分ファンももらい泣きした。小学生のころに才能を受けている師匠の藤島

迷い消えこぶし朗々



「自分の歌に満足はしていません。でもいつか人を感動させることのできる追分を歌いたい。」

今年二月に藤島さんが退院すると毎日歌った。師匠と一緒に練習できる喜びが迷いを消し、再び自信を取り戻した。

だが小学二年から指導を受けている師匠の藤島

見いだされ、昨年の大会前には優勝候補にも挙げられた。

重悦さん(父)が昨年七月、大会を二カ月後に控えて胃がんで入院した。心に動揺が広がりが出た。決選会への出場権すら手に入れられなかった。

「恩返しも込めて、とにかく歌い遂げたかった」

(江差支局 中島 威)

平成 15年 9月 23日 北海道新聞

江差追分を 江差高校で選択科目に

本年四月から江差高校と江差南高校が統合することになったが、統合される高校で江差追分を選択科目に取られることになった。民謡を高校科目に取れるのは道内では初めてだが、おそらく全国にも例がないのではないかと。

江差追分は北海道の無形民俗文化財になつてはいるが、民謡のなかでも難しい唄で、最も優れた民族音楽だといわれている。

授業がはじまるのは明年二〇〇五年になるが、週二時間程度、追分会や追分師匠の協力で授業を行うという。

江差追分をうたう実技や歌詞、歴史をもつ追分のなりたちやその社会背景を学ぶ。江差高校長は「伝統芸能で感性を育てたい。道内から興味のある生徒が集まるとうれしい」と話す。

江差追分の第一人者、道文化財保護功労賞を受賞した青坂満師匠は「江差追分は人間の生き方そのものがうたいこまれている。追分の心をぜひ学んでほしい」と期待をよせている。

地域の文化を学び体験することによって若い世代が追分に関心をよせ、成人したときそれを誇りに思うだろう。追分を担う人たちの育成に画期的な役割を果たすことを期待したい。

北海道文化財保護功労賞 青坂満上席師匠が受賞

江差追分の伝承に取組む青坂満上席師匠（七一）が、第三九回道文化財保護功労賞に選ばれた。昨年十月三十一日札幌市の道庁赤れんが庁舎で表彰式が行われ、青坂師匠は受賞者を代表して、「受賞者のみなさんとともに北海道の文化に力をつくしていきたい」と謝辞を述べ、その席で江差追分を熱唱した。

幼いころから漁師たちのうたう追分に聴き惚れ、成人してから初代近江八声師に入門、第六回江差追分全国大会で優勝、以来追分にうたいこまれた真実の唄を求めて修業をつみ、自らの境地をひらく。

昭和四十九年、鵬声会を設立、会員の指導に当り全国大会の優勝者を輩出する。現在は江差追分会副会長、師匠会会長



受賞の青坂満師（中央）と出席の追分会員

をつとめ、追分会館の専任指導者として来館者の実技指導に携わる。

今も海に出ないと気が落着かないという漁師気質で「追分は命をかけて海を渡った船乗りの切なさや喜びをうたうもの。時代が変つても人の魂や心をゆさぶるのが本場の追分だ。海と人、心の糧である追分を愛して、昔ながらの追分をいつまでも歌いつづけたものだね」と語る。

受賞後の十一月十六日、江差では受賞を祝う実行委員会を組む、町内のホテルニューえさしで、二百余人が集り祝賀会を行った。江差追分部門の受賞者は、國仙重作（昭和四十五年）近江タキ（昭和五十五年）について三人目。

和洋両唱 江差追分日本一 木村香澄コンサート 札幌 k i t a r a

十七歳で江差追分全国大会で優勝した江差町の「天才歌姫」といわれる、木村香澄さん（二九）の初コンサートが十一月二十一日札幌コンサートホール k i t a r a で開かれた。

「和洋両唱」のテーマで民謡だけでなく、ギターに合わせてブルースやオリジナル曲にも挑戦するという新しい試みが、k i t a r a ホールに響いた。本場追分の一人者青坂満師匠も応援出演した。

このコンサートはニシン漁で栄えた北前船時代の誇りである江差追分を若い世代に広げようと、有志が実行委員会を組織して開催にこぎつけた。

江差追分は年々裾がりをみせているが、半面会員が老齢化して組織として減少傾向が危まれている。追分は民謡のなかの頂点にあるといわれているが、若い世代の浸透は以外と少ない。また道内道外都市地域でファン層に働きかける公演の機会も少ない。

今回は札幌 k i t a r a という道都一流のコンサートホールで行われた公演の成果は大きい。

今回入場者に詳細なアンケートが出されたが、七割の回答がよせられたことも関心の高さを反映したものである。今後こういう活動を継続して、新たな追分愛好者、特に若年層を掘りおこす活動組織をたちあげてほしい。



支部の動き

『江差追分娘』らが

新春を彩る

一月十八日江差町文化協会と町教育委員会の主催で「新春ヤング民謡フェスティバル」が町文化会館で開催された。

江差追分などで活躍している歌い手のほかに秋田から十九人をよんで、豪華な民謡と踊りの共演で新春を飾った。

地元から出演したのは、昨年札幌で「和洋両唱追分コンサート」を成功させた江差追分日本一の木村香澄さん、昨年追分日本一の寺島絵里佳さん、妹の入賞五位の絵美さん、昨年追分少年全国大会最年少優勝の中島琴美さんなど六人の「江差追分娘」と伴奏者あわせて十人。



一方秋田からは秋田船方節の全国大会優勝の小田島淳美さん、生保内節全国大会優勝の田中恵さんらを中心とした、秋田小田島民謡学院（小田島純子院長）で学ぶ十九人が参加した。

公演では民謡のほかに津軽三味線や踊りなども出演、「追分娘」の歌と学院生の踊りが共演されて、会場の観衆を湧かせた。また田村つくしさん（五歳）の江差馬子唄は可愛らしく、津軽三味線全国大会B級チャンピオン浅野祥さん（中二）の曲弾きは人気をあつめていた。

若い世代の追分育成に取組む

大阪なにわ支部長田中光男

大阪なにわ支部長田中光男さんは、若い江差追分の歌い手を育成しようと民謡会の子どもたちを支部に入会させ江差追分を指導している。

大阪の「民謡酒場ことぶき」を練習会場にしているが民謡会の子どもたちが集ってくる。店主の遠藤小百合さん（三四歳）が若いころからの民謡の歌い手で秋田本庄追分で優勝、大阪サンケイ民謡大賞も受賞している。夫内田実は西日本随一の民謡三味線家で祖父も尺八、三味線弾きの民謡一家。

追分支部に入会したのは店主の遠藤小百合（旧姓）娘真衣（小三）大黒恵子（二三）嘉陽絵理（二二）地位朝美（中一）。メンバー田中支部長の指導で追分に興

味をもち励んでいるが、地位朝美は道南口説少年の部で優勝しており、次回追分少年大会に出場をめざしている。

追分は年輩者志向だが、次の世代に引きついでゆくには若い年代の取組みが欠かせない。田中さんは「これからも若い人方によびかけ会員を増してゆく」と意欲をよやしている。

同支部会員の翔田ひかりも追分セミナーに参加するなど追分に取組んでいるが、一月二十五日民謡十二単コンサートを開催、若い仲間と民謡活動を展開している。



遠藤小百合さん（前列右）と支部入会の子どもたち

少年優勝の中島琴美さんら

唄とおどりのクリスマスプレゼント

江差追分会かもめ会（江差・本庄志津男支部長）は第四十一回全国大会少年優勝の中島琴美さん（小四）妹弥生（小三）の歌い手二人と追分踊りグループ五人（岸田宣子（小五）岸田征子（小四）

千山佳織（小四）明石菜々（小一）大原寧々（小一）が老人福祉センターで、江差追分と追分踊りを慰問提供した。

昨年十二月二十二日から二十五日までの五日間、同センターで行われているデイサービスのお年寄りに、クリスマスプレゼントの慰問を行った。毎回十五、六人のお年寄りが子どもたちの唄と踊りに涙をうかべて拍手をしていた。追分踊りグループは追分踊保存会石田久枝さんが指導している五人で大人会員も応援した。かもめ会の会員も伴奏など応援した。

一月七日には追分の唄と踊りメンバーは特養老人ホームえさし荘を慰問して多勢のお年寄りによるこぼれた。

追分指導をしている杉山由夫師匠は「このように子どもたちが発表する機会があれば励ましになります。これからもつづけてゆきたい」と話している。



中島 琴美さん 唄とおどりグループ

第四十一回

江差追分全国大会表彰

〔功勞表彰〕

石田 廣（江差町濤声会支部）

尺八伴奏者として永年にわたり全国大会及び、国内外の公演、音楽祭などに参加し、江差追分の普及発展、後継者の育成に尽力した功績による。

〔感謝状〕

国 本 誓 江（白老町白老白声会支部）

昭和六十一年白老白声支部結成以来、大病にもめげず、支部長として会員の育成指導に努め江差追分の普及に貢献された。

〔奨励賞〕

支部活動の顕彰として本年度より創設。

永年にわたり追分会支部として、組織の発展に寄与し、支部活動を通して、江差追分の普及伝承に貢献が顕著。

声友会支部（江差町）

帯広支部（帯広市）

愛知三河支部（愛知県）

秋田王藤会支部（秋田県）

第十回投げ銭

チャリティーコンサート

三月七日・函館声徳会支部

江差追分や民謡で地域活動をすすめている江差追分函館声徳会（内村徳蔵支部長）は三月七日、函館市東山、東本願寺

函館別院東山支院で「第十回投げ銭チャリティーコンサート」を開く。

このチャリティーコンサートは、「唄って・笑って・春が」をキャッチフレーズに「思いやりの心」で企画し、江差追分師匠や優勝者も招いて、本年は第十回を迎える。

今回は第二十六回江差追分日本一久保田勝美（札幌）第三十八回日本一辻真由美（現姓花田・函館）のほか、尺八、三味線奏者など和楽器研究者も招いて第十回目を飾る。

オープニングは恒例の「市民参加の江差追分大合唱」で幕開けする。

内村支部長は「多くの人に参加してもらい江差追分の魅力をアピールしてゆきたい。文化を通して社会貢献できることはうれしい」と語る。

事務局より

江差追分会十六年度事業計画表（予定）

○理事会・総会

○平成十六年度江差追分会第一回理事会
平成十六年四月二十五日

○平成十六年度江差追分会第二回理事会
平成十六年七月十七日

○平成十六年度江差追分会総会
平成十六年四月二十五日

○江差追分全国大会
平成十六年九月十七日・十八日・十九日（三日間）

○江差追分会師匠会研修会

第一回研修会

平成十六年十月十六日・十七日（二日間）

第二回研修会 平成十七年二月二十日

○江差追分会師匠会総会

平成十七年二月二十日

○江差追分セミナー

平成十七年二月三日～二月二十六日まで
毎週木・金・土 四週開催

入館者百万人突破

江差追分会館

9月5日

昭和五十七（一九八二）年の開館以来、十二年目で百万人の入館者を達成しました。

当日は、群馬県藤岡市の水谷智恵ちゃん（三歳）が百万人目となり、花束や記念品が贈られました。

ステージでは、追分会の青坂満上席師匠から正調江差追分の譜面も送られ、ご両親とおばあちゃんと一緒に道南旅行中の智恵ちゃんもちょっぴり緊張気味。帰りには笑顔で会館をあとにしています。



あとがき

会報「ヤンサノエ」の編集を芸能部門（岩淵啓介・館和夫・松村隆・高田裕）が担当することになりました。四人で協議して理事会という運営部門に参画していることだからその一端は担うべきだろうとお引受けすることにいたしました。編集にあたっては、報告や連絡記事だけでなく、会員に親しんでもらえる誌面づくりを心がけていきます。これからの志向も取材にとり入れたいと思っています。

▼地区、支部の動きも掲載したいと思えますので、なるべくお早目に予定や内容をご連絡ください。内容については編集委員から照会することもあると思いますのでお願いします。

▼本号には論考母音を聴く江差追分（岩淵啓介）人物伝「SPレコードを聞きながら」高田裕を特集しました。毎回特集投稿も掲載したいと思えますので、ご意見をお寄せください。

▼全国大会終了後年内発行の予定が遅れましたが今後は定期に発行できるように心がけていきます。

【編集】 岩淵啓介・松村 隆

館 和夫・高田 裕

【企画】 山崎 透・森山弘之

国仙敏孝